

《研究ノート》

大黒屋光太夫筆ロシア文字福寿と福寿草流行について

松田 清

はじめに―光太夫資料との出会い

伊勢の港町白子しろこの船頭大黒屋光太夫（一七五一―一八二八）は一七八三年一月十五日（天明二年二月十三日）に遭難し、ロシアに漂流。ロシアの女帝エカテリーナ二世の許可を得て、一七九二年一〇月九日（寛政四年八月二十四日）、使節アダムス・ラクスマンに送られ、一〇年ぶりに、部下の小市いち、磯吉とともに根室に帰国した。翌年、小市は根室で病死したが、光太夫と磯吉は江戸に移送され、幕府の対ロシア政策に必要な貴重なロシア情報をもたらした。

一七九三年一〇月二二日（寛政五年九月一八日）、二人は將軍家育の上覧を受けて時の人となった。將軍侍医・蘭学者桂川甫周は光太夫からロシア事情を聞き取り、翌年、日本最初の本格的なロシア研究書、『北槎聞略』を著した。

將軍上覧の当日、奥医師多紀元徳が絵筆をとり光太夫、磯吉の二人を観察して描いた。その肖像画は伝存未詳であるが、これと深い関係がうかがわれる「大黒屋光太夫・磯吉画幅」（鈴鹿市蔵、本紙一三×五〇cm）がある（図1）。上覧当日の二人の服装、出で立ちを正確に描写したと思われるこの画幅は、当初二〇〇八年一月のオークションカタログに



図1 大黒屋光太夫・磯吉画幅
鈴鹿市蔵

「紅毛人画幅」と題して写真が掲載された¹⁾。筆者がその写真に気づいたのは一〇月二五日であった。十一月一七日の下見会で実物に接し、光太夫・磯吉の肖像画であることを確認するや、懇意の古書店主に作品の重要性を説明した。幸いにも落札がかない、しばらくして無事、大黒屋光太夫記念館に収蔵された。

三年後の二〇一一年一二月、筆者は京都の本草漢学塾山本読書室旧跡の土蔵を調査中、「七五三福寿草写生²⁾」と題する美麗な彩色図集を手にした。「七」は七福神、「五」は鶴亀松竹梅、「三」は古来和歌三神と呼ばれた柿本人麻呂、玉津島姫、山部赤人を指す。それぞれの図像を焼き付けた染付鉢一五台に、福寿草の奇品一五種を植えた盆栽の図集である。

二〇一五年四月一日から一年間、土蔵から出た山本読書室資料を毎日、写真とともに紹介する京都新聞の連載コラム「京の学塾 山本読書室の世界」を執筆することになった。福寿草は元日草とも呼ばれ、元日に飾るめでたい草であるので、旧暦の正月にあたる二〇一六年二月八日から三日間、コラムで「七五三福寿草写生」を取り上げた。二月一〇日のコラムでは、編者（姜氏）未詳）の序文により、福寿草の流行は文化年間に始まることを紹介した³⁾。

また、嘉永元年に江戸の植木屋内山長太郎らが福寿草の名品七点に七福神の名を付けた彩色図「七福神草」を作成して

いるところから、「七五三福寿草写生」も同時期に同様の着想から編集されたのではないかと推定した⁵⁾。

「大黒屋光太夫・磯吉画幅」に出会ってからちよūd八年後、二〇一六年一〇月一〇日、本学附属図書館所蔵若林正治コレクション（のちに神田佐野文庫の中核となった）を整理中に「大黒屋光太夫筆ロシア文字福寿」（図2）が出現した。旧蔵者の若林正治（一九二一〜一九八四、伏見春和堂主人）はこの揮毫の素性を知らなかったようだ。「ŌYKIKHO」（フクジュ、福寿）と墨筆大書し、下部に「ICE: Taku. Koo.」（イセ ダイコー、伊勢大光）と署名があった。

大黒屋光太夫記念館の代田美里学芸員から、光太夫自筆のロシア文字の揮毫には、イロハ（二三例）の他に、めでたい文字としては、ツル（六例）、フクジュ（四例）、カメ（二例）、マツ（一例）が知られており、若林正治コレクションのフクジュは五例目であること、同館所蔵のフクジュには「文化九年申歳五月吉日 大光書 六十式翁」の落款があることを教えられるや、筆者は福寿草の流行は文化年間に始まる、という「七五三福寿草写生」序文の証言を思い出した。

当時未見であったが、享和年間に將軍家斉に献上された福寿草を描いたという写生図⁶⁾が伝わっていることも、福寿草流行が文化年間に始まった契機と考えられた。以来光太夫筆ロシア文字福寿と文化年間から幕末に至る福寿草流行に関わる



図2 大黒屋光太夫筆ロシア文字福寿 神田外語大学神田佐野文庫蔵

資料に関心を払ってきた。

本稿では、神田佐野文庫所蔵大黒屋光太夫筆ロシア文字福寿の成立時期、山本読書室資料「七五三福寿草写生」の成立事情、最近新たに神田佐野文庫に加わった「福寿草画賛」について、関連資料と合わせて書誌的考察を行う。福寿草資料四点の写真(図5〜図8)は論述順よりも資料構成を優先し、一括して掲載した。

1 光太夫ロシア文字福寿の成立時期

神田佐野文庫所蔵大黒屋光太夫筆ロシア文字福寿(本紙三 cm×四七 cm、以下、若林本)はロシア文字「ФУКУШО」(フクシユ、福寿)とロシア文字の署名「[С.Е. Дав. Кoo.]」(イセ ダイコー、伊勢大光)からなり、年記を持たず、成立時期が分からない。

鈴鹿市所蔵の書幅「大黒屋光太夫福寿」(図3、本紙二九 cm×四六・五 cm、以下、鈴鹿市本)は、光太夫の地元鈴鹿市若松町に伝わったもので、ロシア文字「ФУКУШО」とロシア文字の署名「[Дав. Кoo.]」に加えて、「文化九申歳五月吉日／大光書／六十式歳」の墨書がある。若林本、鈴鹿本ともに「ФУКУШО」は墨筆大書されている。

別の個人蔵の揮毫は両者よりも小ぶりのロシア文字「ФУ-

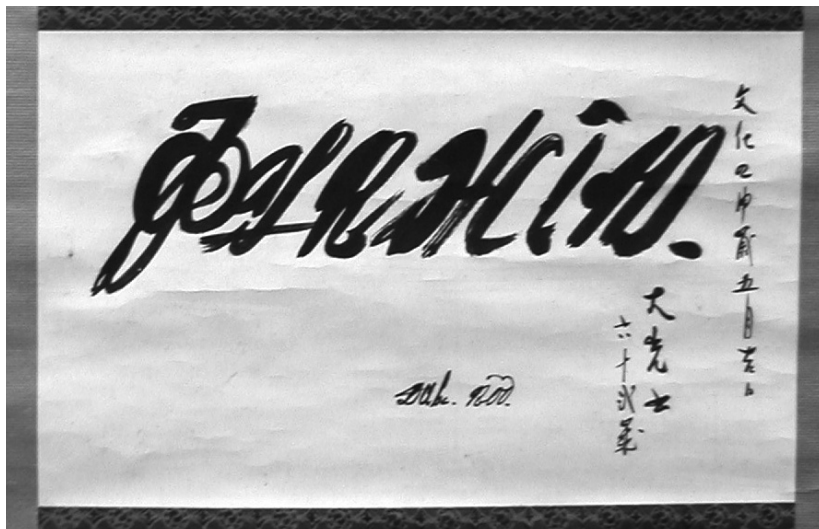


图3 大黒屋光太夫福寿 鈴鹿市蔵

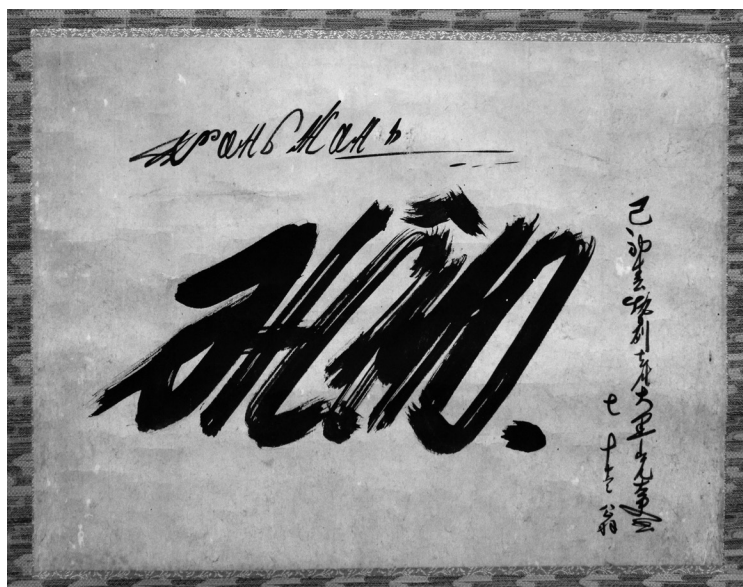


图4 大黒屋光太夫南山寿 鈴鹿市寄託 個人蔵

KY. ЖИЮ / Дан. Коо.」に「ふ」「く」「寿」「大」「光」と読みを添え、「福寿 大光／大黒光太夫書／六十七翁」と落款す

一方、地元には「南山寿」（李白の詩に由来し長寿を意味する）をロシア文字で揮毫した光太夫の書幅が二点伝わる。いずれも七〇代の書で若林本・鈴鹿本よりも大きく力強い筆致である。そのうち鈴鹿市寄託品の書幅（図4、本紙三九・五cm×五二・二cm）には、「Нань жань / жию. / 巳初春勢州産大黒光太夫書／七十老翁」と墨書する。「巳初春」は文政四年（一八二二）正月にあたる。

もう一つの個人蔵の書幅には「Наньжань (なんざん) / жию. (寿)」と読みを添え書きし、「南山寿／甲申冬勢州白子産／大黒光太夫書／七十四翁」と落款する。「甲申」は文政七年（一八二四）にあたる。

光太夫は高齢になるほど揮毫の文字が大きくなる傾向があり、鈴鹿本は六二歳、個人蔵の福寿は六七歳の作であるところから、若林本も文化年間、六〇代の作と推定される。

2 山本読書室資料「七五三福寿草写生」の考察

構成

「七五三福寿草写生」（京都府立京都学・歴史館寄託山本読

書室資料一三三七、縦二七・二cm×横一八・七cm）は、右袋綴じ、表紙の題簽（縦一九・一cm×横三cm、金紙）に「七五三福寿草写生」と墨書する。本文は九丁からなり、半丁ごとに福寿草写生図を計一五図描く（図5）。画者の落款はない。福寿草はすべて同様の染付鉢に植えられ、鉢に立てられた札には花の特徴を表す名称が墨書され、判読出来る。染付鉢の台座はすべて同様の朱色三脚台である。構成は次の通り。各写生図に一連番号を付す。

- 一才 序文（末尾に「姜氏述」）
- 一ウ ①染付鉢（鶴）「秩父紅」札
- 二才 ②染付鉢（亀）「車屋白」札
- 二ウ ③染付鉢（松）「爪折笠」札
- 三才 ④染付鉢（竹）「裏紅撫子咲」札
- 三ウ ⑤染付鉢（梅）「松葉重段咲」札
- 四才（白紙）
- 四ウ ⑥染付鉢（人麿）「天守り」札
- 五才 ⑦染付鉢（玉津嶋）「丁字車咲」札
- 五ウ ⑧染付鉢（赤人）「青花三色咲」札
- 六才（白紙）
- 六ウ ⑨染付鉢（大黒天）「青梅万福咲」札
- 七才 ⑩染付鉢（蛭子）「裏紋り石竹咲」札
- 七ウ ⑪染付鉢（福祿寿）「三段咲」札

- 八才 ⑫染付鉢（毘沙門天）「魚子咲」札
 八ウ ⑬染付鉢（布袋）「青梅青軸」
 九才 ⑭染付鉢（弁財天）札「淺黄咲」
 九ウ ⑮染付鉢（寿老人）札「長嶋」

序文

「姜氏述」とある戯文めいた序文は福寿草流行が文化年中に始まること、福寿草の奇品七品を描かせ、七福神草と名付けた由来を述べる。しかし、本文で七福神の前に位置する鶴亀松竹梅および和歌三神（人麿・玉津嶋・赤人）の八品にまつたく触れていないため、全体の序文としては奇異な印象を与える。左に序文を翻刻する。読点、濁点、振り仮名、振り漢字は私に付けた。「年中の詠」は「手中の珠」の誤記。

時に文化年中をはじめとして以来福寿草流行仕、（つかまゝ） 晷、追々奇品珍華をひらく事挙てかぞえがたく、然に是を模写して年中の詠とせしことを希、（まが） 或人に絵が、せ、誠に春のはじめなればとて福寿草を七福神に譬え、榊原の万福咲の福々しさ大黒天の御姿と見奉るもかしこしな、絞りの石竹咲きのひれ振立てしてハ夷三郎殿の愛なふ魚に似て、段咲の三色に開くを福祿寿、魚子咲の重あつきハ明珍（あたま） 緞の小札に似て毘沙門天の御鑑と見え、青梅出の青莖（あおすじ）にはらふくれめきしハ布袋和尚、白花の貴なるハ弁

財天の素顔かや、また長嶋の永々しき盛り久しきハ寿老人と、指を折（おれ）バ七福速成、（やくしやう） 数々日出度、七福神草と欲笑の余りに名付はべりぬ

姜氏述

伊藤圭介の写本

本草・植物学者伊藤圭介の筆録集「植物図説雑纂」（国立国会図書館所蔵）の冊一六〇に、「七五三福寿草写生」の序文とはほぼ同文の序文をもつ福寿草彩色図集（無題、五丁分）の写本が綴じ込まれている。

この写本の冒頭に貼り付けられた圭介の朱書に「此福寿草ノ図ハ巢鴨ノ花戸卯之吉ノ蔵本ヲ借りテ写シ置クモノトス」とあるところから、磯野直秀（二〇〇三）は「卯之吉所蔵福寿草図譜」と名付けた。卯之吉すなわち花戸内山長太郎の弟内山卯之吉から圭介が借写した蔵本と「七五三福寿草写生」との密接な関係がうかがわれるので、圭介のこの写本と「七五三福寿草写生」を比較しよう。

まず、圭介写本の序文を左に翻刻する。読点、濁点は私に付けた。文字遣いに多少の異同が見られるが、大きく異なるのは撰者名が「姜氏述」ではなく、「栽花園／寿山園／清水亭」となっている点である。栽花園は内山長太郎、寿山園は内山卯之吉の園名または号である。清水亭は未詳。

時に文化年中をはじめとして已来福寿艸流行仕躰、追々奇品珍華をひらくこと挙てかぞえがたく、然に是を模写して年中の詠とせし事を希、或人に絵が、せ、誠に春のはじめなれば迎福寿草を七福神に譬え、榊原の万福咲の福々しさ大黒天の御姿と見奉るもかしこしな、絞りの石竹咲きのひれふり立てしハ夷三郎殿の愛なふ魚に似て、段咲三色にひらくを福祿寿、魚子咲の重あつきハ明珍鍛の小札に似て毘沙門天の御鎧と見え、青梅出の青莖ハ腹ふくれめきしハ布袋和尚、白華の貴なるハ弁財天の素顔かや、また長嶋の盛り久しき永々しきハ寿老人と、指を折ハ七福速成、かずく目出度、七福神草と歛笑の余りに名付はべりぬ

栽花園

寿山園

清水亭

圭介写本の福寿草図(図6)は一四図からなり(半丁に二図を配す)、前半の一〇図は「七五三福寿草写生」の三歌神の福寿草図(⑥⑦⑧)および七福神の福寿草図(⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮)とよく一致するが、いずれも盆器(鉢・台座)と鉢札を省略し、開花した福寿草のみを抄写して、鉢の図柄名(三歌神、七福神)と鉢札名を添える。

後半の四図も盆器、鉢札を省略し、俳句贅が一句づつ転写

されている。うち三図は「七五三福寿草写生」の鶴①、亀②、竹④と花、葉、莖、色調ともよく一致する。写本の構成を丁数とともに表示しよう。「七五三福寿草写生」中的一致する写生図の図番号を付す。また、後半の四図は、俳句贅の翻刻を示す。

一オ・ウ 序文(貼紙・圭介の朱書)

二オ 「人麿/天守り」 ⑥

「玉津嶋姫/折霧咲」

二ウ 「赤人/青華」 ⑧

「大黒天/榊原万福咲」

三オ 「夷三郎/絞り石竹咲」 ⑩

「福祿寿/三段咲」

三ウ 「毘沙門天/魚子咲」 ⑫

「布袋/青梅青莖」

四オ 「弁財天/浅黄白」 ⑭

「寿老人 長嶋」

四ウ 「初日にも見贖ふ色や/秩父紅」 ①

「春雨や車屋白の咲こ、ろ」

五オ 「今朝のあめ撫子咲の和らかみ」 ④

「鱗なくや酒依紅のひらく頃」(鱗は蝶の誤字)

圭介写本と「七五三福寿草写生」の両者の書き入れを比較すると、四図に次のような相違点が見られる。

「七五三福寿草写生」 圭介写本

記号を付ける。

⑦ 「玉津嶋」「丁字車咲」 「玉津嶋姫／折露咲」

一才 a 無地緑青色鉢「大黒天」札「榎原万福咲」札

⑧ 「赤人」「青花三色咲」 「赤人／青華」

朱色三脚台

⑩ 「蛭子」「裏絞り石竹咲」 「夷三郎／絞り石竹咲」

一ウ b 無地白色鉢「恵比須」札「絞り石竹咲」札

⑬ 「布袋」「青梅青軸」 「布袋／青梅青茎」

朱色三脚台

したがって、「七五三福寿草写生」は写生図に俳句画賛を

二才 c 唐草文青緑色鉢「寿老人」札「段咲」札

欠くことも考え合わせると、圭介が模写した「巢鴨ノ花戸卯

朱色円台

之吉ノ蔵本」ではないことが明白である。しかしながら、鶴

二ウ d 無地白色鉢「毘沙門天」札「魚子開」札

亀竹、三歌神および七福神の福寿草図が花、葉、茎の形姿、

朱色三脚台

位置がよく一致するだけでなく、序文の本文が表記上の差異

三才 e 無地白色鉢「布袋」札「青梅出青茎」札

を除けば同文と見なしうるので、「七五三福寿草写生」と卯

三ウ f 無地青緑鉢「弁財天」札「白花」札

之吉の蔵本はきわめて密接な関係にあることが分かる。

朱色三脚台

稿本「七福神草」

当初「七五三福寿草写生」の成立時期を推定する手がかり

四才 g 無地黒色鉢 札「福祿寿」 札「長嶋」

としたのは、巢鴨の花戸内山長太郎らが作成し、嘉永元年正

四ウ (白紙)

月成立という写本「七福神草」であった。この写本は近代の

五才／六才 (後記)

装丁とみられ、表紙に「七福神草」の題簽があるも、内題を

六ウ (白紙)

欠く。七福神の名を冠した福寿草七品の彩色図集である(図

右七品を植えた鉢は同型で、cを除き、同様の朱色三脚台

7)。振り仮名を施した後記などの体裁から、刊行を意図し

に載せられ、全て無地。七福神名は鉢に立てた札に墨書され

た稿本と考えられる。全六丁の内訳は次の通り。一才に白井

ている。

光太郎の蔵書印「白井氏蔵書」がある。七品各図にa～gの

七品a～g図を「七五三福寿草写生」の対応する七品⑨)

⑮図と比較すると、まず七品の掲載順序が一部異なることに気づく。次に、a「大黒天」図と⑨図、c「寿老人」と⑮図は品種が一致しないが、他のb「恵比須」図と⑩図、d「毘沙門天」図と⑫図、e「布袋」図と⑬図、f「弁財天」図と⑭図、g「福祿寿」図と⑪図はそれぞれ同品別図と認められる。したがって、「七福神草」の七品図と「七五三福寿草写生」の七品図はあまり密接な関係になく、画者も異なると判断される。

後記は「巢鴨ノ花戸卯之吉ノ蔵本」の序文から冒頭の一節を削除改変し、原文が「或人に絵が、せ」云々と画者名を伏せているのに対して、画者を群芳園主人（斎田弥三郎）と明記していることが注目される。

磯野直秀（二〇〇三）は「卯之吉所蔵福寿草図譜」（すなわち伊藤圭介が模写した卯之吉蔵本）を「七福神草」よりも後の成立とし、前者の七品は「七福神草」と同品別図であり、その前文（序文）も「七福神草」の後記に少々手を入れたものとする。しかし、上述のように七品すべてが同品別図ではなく、画者名の有無、後記の体裁、画者の異なることを考慮すれば、両者の成立の順序は逆でなければならぬ。後記の全文を改行は除いて、原文に忠実に翻刻しよう。

春のはしめ羣芳園に遊び主人が福寿艸を写すをみれハ糊原の万福咲の福々しさ大黒天の御姿と見奉るもかしこし

な絞りの石竹開の鱈ふり立てしハ夷三郎殿の愛なふ魚に似段咲の盛久しきは取も直さず寿老人魚子開の重厚ハ明珍鍛の小札に似て毘沙門天の御鏡と見え青梅出の青茎の腹ふくれめきしハ布袋和尚白花の貴なるハ弁財天の素顔かや又長嶋の長々しきハ重三つ揃ひし福祿寿と指を折は七幅速成の数々目出度此草は是七福神草と歎笑の余りに名付はへりぬ

羣芳園弥三郎

栽花園長太郎

帆分亭六三郎

内山卯之吉蔵「福寿草・芍薬写生」

伊藤圭介が福寿草図を借写した「巢鴨ノ花戸卯之吉ノ蔵本」と判断される写生図集の残欠本（個人蔵）を二〇二三年九月末に調査することが出来た。元表紙（裏表紙とも）と鉢植えの福寿草彩色写生図七図（各図、縦三六九mm×横二五八mm）からなる（図8）。元表紙の左上に打付書きで「福寿草・芍薬写生」と書名を墨書する。現在は大判の折帖（五丁、縦三七cm×横二六cm）に改装されているが、成立時の完本も折帖であったと推定される。

元の裏表紙の左下に「東都巢鴨里ノ寿山園ノ内山卯之吉蔵ス」との墨書がある。また、第六図（「玉孔雀」）に、この福

寿草の持主として、卯之吉が「東都巢鴨／栽花園隣地／寿山園／所持」と自書している。兄の栽花園内山長太郎の隣地に寿山園を営み、寿山園と号していたことが分かる。

書名の「福寿草・芍薬写生」から推定して、本来、福寿草写生図と芍薬写生図が合装されていたはずであるが、欠落している。圭介が福寿草図と同様に卯之吉蔵本から借写した芍薬図譜が「植物図説雑纂」の冊二二八に伝わる。磯野直秀（二〇〇三）はこれを「卯之吉蔵芍薬図譜」と名付け、「一品」からなるとした。実際は、白描に部分彩色を施した模写図二〇図（一九枚）が綴じ込まれ、第一枚目に「此芍薬ハ卯之吉蔵本ヲ写ス」、第十九枚目に「右芍薬ノ図ハ卯之吉ノ蔵本ヲ写ス」と注記する。この「卯之吉蔵本」こそ「福寿草・芍薬写生」に違いない。模写された芍薬図二〇図に付けられた品名は次の通りである。

「大世界」「三色夜中」「底紅」「紅千鳥」「移り白」「山下の水」「東にしき」「江戸ノ花」「凌羅錦繡」「白玉生後」「玉ノ台」「寿亭侯」「七宝寿」「随一白」「朱方殿」「蒲紋り斑入」「実生紋り」「倭言葉」「後裁手玉」「天上人改雲ノ上」

圭介写本（「卯之吉蔵福寿草図譜」）に転写された序文および模写された一四図のうち、序文と和歌三神（人麿・赤人・玉津嶋姫）・七福神の一〇図は、本来この卯之吉蔵「福寿

草・芍薬写生」に備わっていたはずであるが、失われている。俳句画賛とともに模写された残る四図はこの卯之吉蔵本の鶴亀松竹の福寿草図と俳句画賛も含めてよく一致する。梅図はなぜか模写されていない。

「福寿草・芍薬写生」で、かろうじて遺失をまぬがれた福寿草写生図七図の内、最初の五図（鶴亀松竹梅の染付鉢）は鉢の立て札を欠くが、「七五三福寿草写生」と比較すると、鶴、亀、梅の鉢は花、葉、茎の形態、彩色はそれぞれ①②⑤とよく一致している。松の鉢の福寿草は「七五三福寿草写生」の竹の鉢④と一致し、竹の鉢の福寿草は「七五三福寿草写生」に一致するものがない。染付鉢と朱色三脚台の形は類似しているものの、鶴と梅の鉢の三脚台にある唐草模様は「七五三福寿草写生」には認められない。鶴と亀の図柄は意匠が似ているが、松竹梅の図柄（小松、竹節、梅枝）は「七五三福寿草写生」では、異なる意匠（松葉、笹竹、梅花）となっている。また、「七五三福寿草写生」と違って、各図に俳句画賛が施されている。

このような異同から、「福寿草・芍薬写生」の福寿草写生と「七五三福寿草写生」はほぼ同じ福寿草の名品を対象に、ほぼ同時期、おそらく嘉永元年までに成立し、「福寿草・芍薬写生」は内山卯之吉の自家用であったと推定される。「七五三福寿草写生」は贈答用などに作成された別本ではない

か。

俳句画賛五句のうち四句は、上述のように、図とともに圭介写本の最後の四図とよく一致する。圭介写本の他の模写図は俳句画賛を欠くので、その原本「福寿草・芍薬写生」で俳句画賛の添えられた福寿草図は鶴亀松竹梅の五品のみであったに違いない。

最後の二図には、盆栽の所有者、寿山園（卯之吉）と植木屋松二郎（未詳）の名が見える。二図に「正寿写生」の落款と落款印のある画者「正寿」は未詳。あるいは天保の頃、芝に住した医師、草間宗仙（名正寿、字公肩、通称宗仙^⑧）か。「宗恣二ぬし」（植木屋松二郎）所持の潜咲の福寿草に和歌を寄せた「帆分亭」は「七福神草」の序文撰者の一人、帆分亭森田六三郎である。

この写本の構成は次の通り。各図にA～Gの記号を配し、「七五三福寿草写生」のよく一致する写生図の図番号を添える。

- 一オ（白紙）
- 一ウ 元表紙 打付書きの墨書「福寿草／芍薬写生」は所蔵者の内山卯之吉の筆
- 二オ A 染付鉢（鶴） 札なし 朱色三脚台
「初日にも見贖ふ色や秩父紅」^①
- 二ウ B 染付鉢（亀） 札なし 朱色三脚台

「春雨や車屋白の咲こゝろ」^②

三オ C 染付鉢（松） 札なし 朱色三脚台

「今朝のあめ撫子咲の和らかみ」^④

三ウ D 染付鉢（竹） 札なし

「鱗なくや酒依紅のひらく頃」（鱗は螻^{けら}の誤字）

四オ E 染付鉢（梅） 札なし

「淡雪や松葉重の段に咲」^⑤

四ウ F 肌色鉢（牡丹） 「玉孔雀」札

「正寿写生」（朱文方印「正寿之印」）

「東都巢鴨／萩花園隣地／寿山園／所持」

五オ G 紺色鉢（無地） 「杏葉絞り」札

「正寿写生」（朱文方印「正寿之印」）

「宗恣二ぬしの潜咲の福寿草見て 帆分亭撰」

□□つる花むらさきの福寿草／□□^{（破損）}てふかく契るおもひぞ

「東都千駄木／植木屋／松二郎／所持」

五ウ 元の裏表紙「東都巢鴨里／寿山園／内山卯之吉蔵ス」

福寿草を和歌三神、七福神に見立てる園芸趣味は享和年間に將軍家斉に献上された「珍花福寿草」^⑩にも、奥山正容画写「福寿草紅葉絵本」^⑪（文化一二）にも認められず、嘉永元年前後に巢鴨の内山長太郎・卯之吉兄弟を中心とする植木屋仲間

に始まったものと思われる。小川安村『梅譜』第三版（明治三四）はこの趣味を次のように文化年間に遡らせるが、文面から、おそらく卯之吉蔵「福寿草・芍薬写生」系統の写本による誤伝である。

福寿草は世人の愛玩多きに連れ、種々の園芸的品種を出し、殊に文化、天保より嘉永年間に亘り非常に流行し珍奇の異花を以て一世に誇りたり。文化年中此花を和歌三神、七福神などに見立て其奇を競ひたり。則ち左に其品類を示さば、

和歌三神

柿本人麿 天守り 山辺赤人 青華
玉津島姫 折鶴咲

七福神

○大黒天 榊原満福咲 ○夷三郎 絞石竹咲
○福祿寿 三段咲 ○毘沙門天 魚子咲
○布袋和尚 青梅青莖 ○弁財天女 浅黄白
○寿老人 長島

以上の如く互に奇を鬪はし珍を争へり（後略）¹²。

七福神見立福寿草

東京都立中央図書館蔵「七福神見立福寿草」彩色図（加賀文庫 04103）は縦九三cm×横二七・六cmの本紙に、七福神の

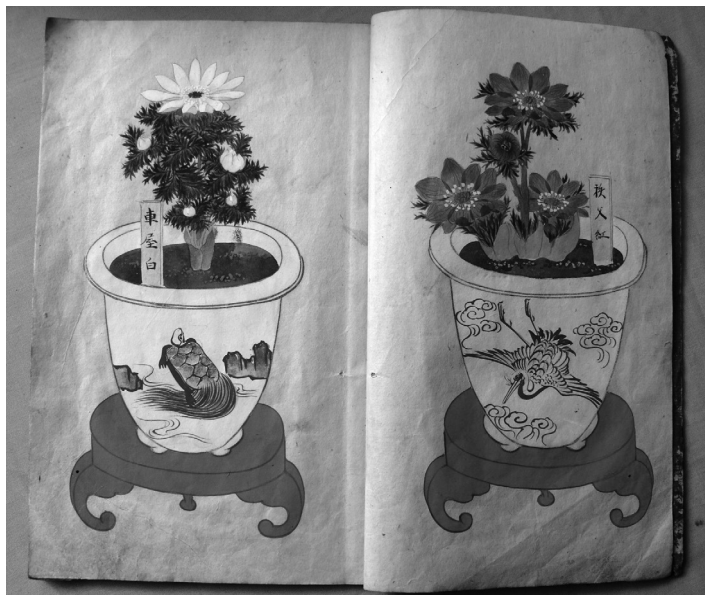
染付鉢（朱色の台付き）に植えられた

福寿草七品を上中下三段に描き、最下段の枠内に識語を書き入れたもので、近代の卷子本仕立である。七品は札の品名と鉢の図柄によって示せば、上段に「榊原万福咲」（大黒）・

「裏絞り石竹咲」（夷）、中段に「魚子」（毘沙門）・「三段咲」（福祿寿）、下段に「長嶋」（寿老人）・「浅黄白」（弁財天）・「青梅青軸」（布袋）を配置している。山本読書室資料「七五三福寿草写生」の七品図⑨～⑬と同工であるが、描き方が粗雑であり、染付は七福神以外、鉢の縁も含めて白地である。

識語末尾に、「安政五年午初春／栽花園／姜氏述」とあるところから、山本読書室資料「七五三福寿草写生」の序文撰者「姜氏」は栽花園内山長太郎と分かる。この識語は仮名・漢字の文字遣いに多少の違いはあるが、「七五三福寿草写生」の序文とはほぼ同文であり、同筆と判断される。しかし、この識語では「是を模写して年中の詠とせしことを希或人二是を画せ」（傍線、引用者）の傍線部の「年」は紛らわしい。「手」の崩しではなく、明確な「年」の草書となっており、長太郎の自筆とすれば、「手中の珠」と意味不明の「年中の詠」を混同しており、その教養が疑われることになる。

② 車屋白
亀



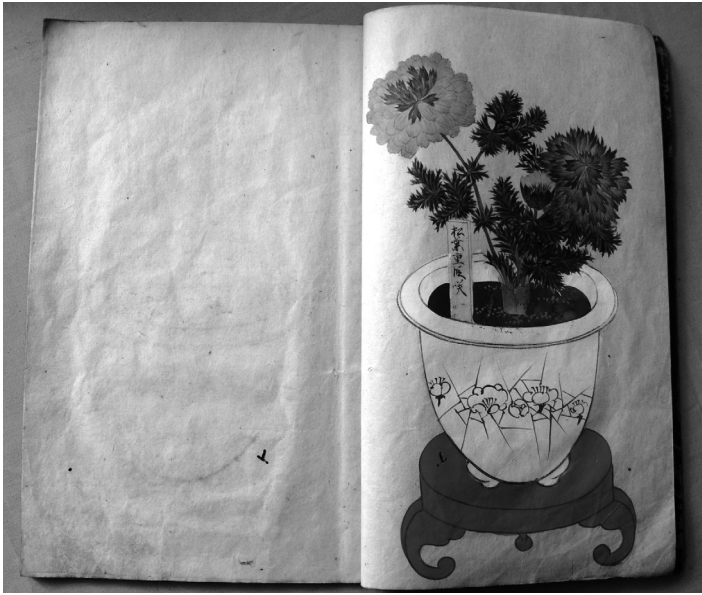
① 秩父紅
鶴

④ 裏紅撫子咲
竹



③ 爪折傘
松

図 5-1 山本読書室資料「七五三福寿草写生」京都府立京都学・歴史館寄託



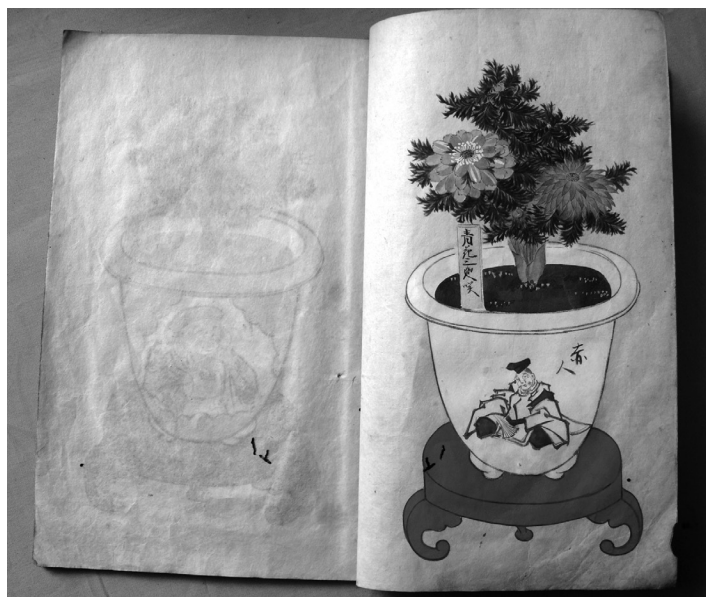
⑤ 松葉重段咲
梅



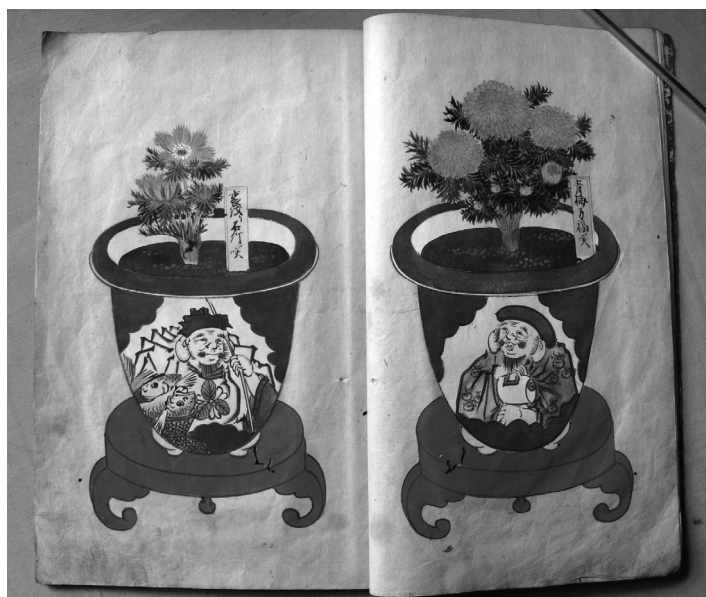
⑦ 丁字車咲
玉津島

⑥ 天守り
人麿

图 5-2 山本讀書室資料「七五三福寿草写生」京都市立京都学・歴彩館寄託



⑧ 青花三色咲
赤人



⑩ 裏絞り石竹咲
蛭子

⑨ 青梅満福咲
大黒天

図 5-3 山本読書室資料「七五三福寿草写生」京都府立京都学・歴彩館寄託

⑫ 魚子咲
昆沙門天



⑪ 三段咲
福祿壽



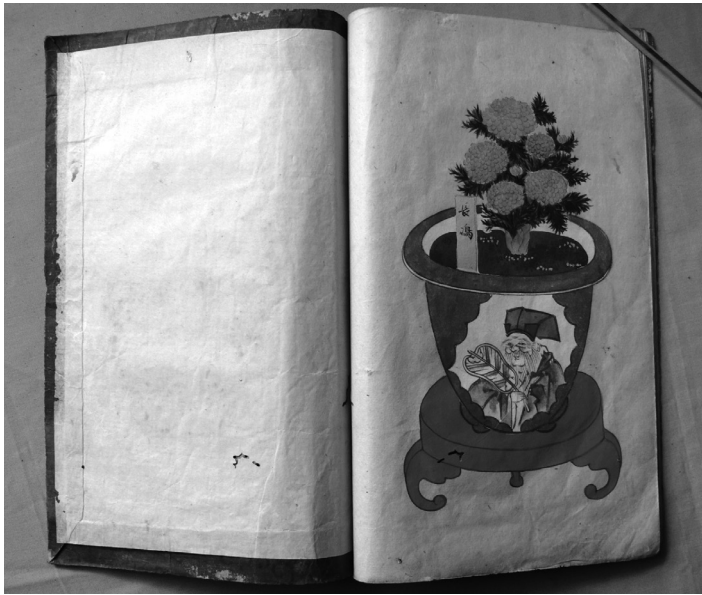
⑭ 浅黄咲
弁財天



⑬ 青梅青軸
布袋



图 5-4 山本讀書室資料「七五三福寿草写生」京都府立京都学・歴彩館寄託



⑮
長嶋
寿老人

図 5-5 山本読書室資料「七五三福寿草写生」京都府立京都学・歴史館寄託

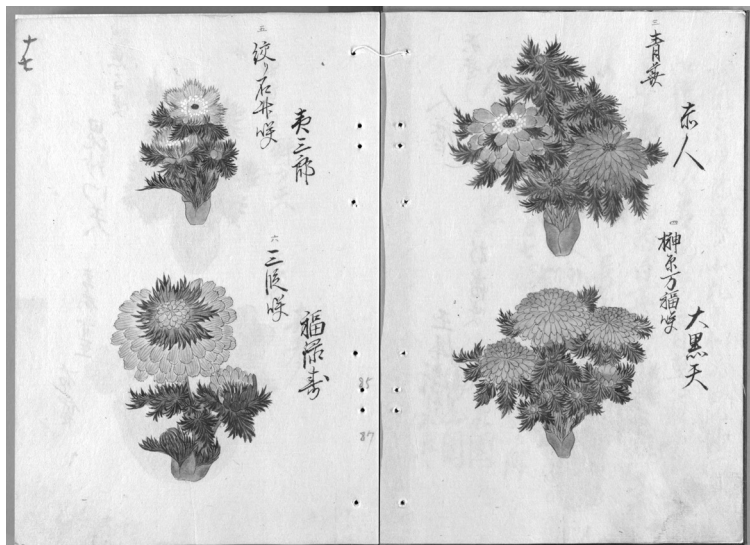


二才

一ウ

図 6-1 伊藤圭介「植物図説雑纂」冊 160 卯之吉福寿草図譜
国立国会図書館蔵 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2571109/1/14>

三才



三才

图 6-2 伊藤圭介「植物図説雑纂」冊 160 卯之吉福寿草図譜
 国立国会図書館蔵 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2571109/1/15>

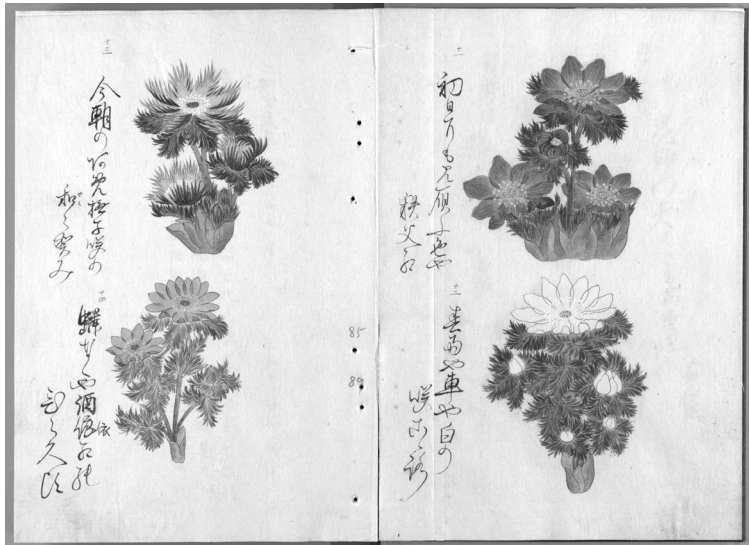
四才



四才

图 6-3 伊藤圭介「植物図説雑纂」冊 160 卯之吉福寿草図譜
 国立国会図書館蔵 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2571109/1/16>

五才



四才

図 6-4 伊藤圭介「植物図説雑纂」冊 160 卯之吉福寿草図譜
 国立国会図書館蔵 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2571109/1/17>

一才
a

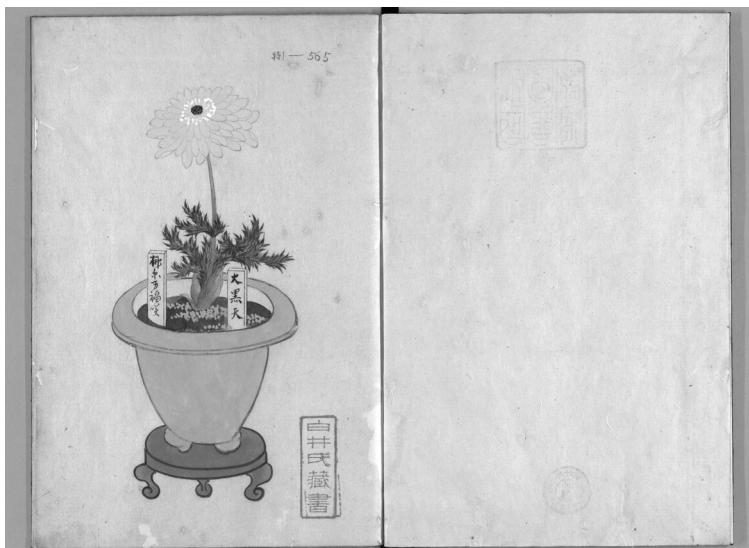
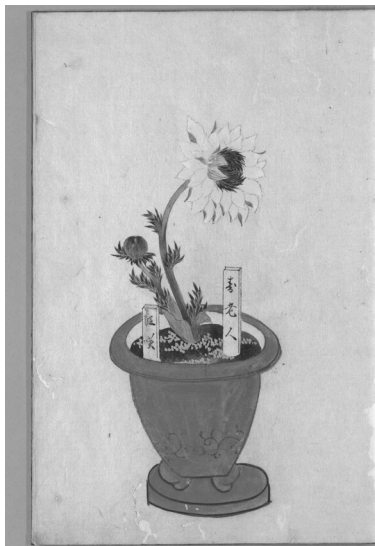


図 7-1 群芳園弥三郎「七福神草」
 国立国会図書館蔵 (特 1-565) <https://dl.ndl.go.jp/pid/2535894/1/3>

二才
c



一才
b

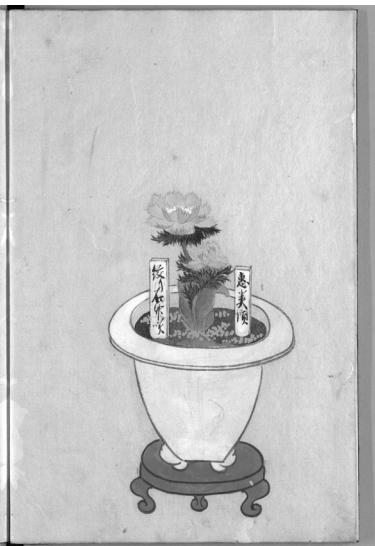
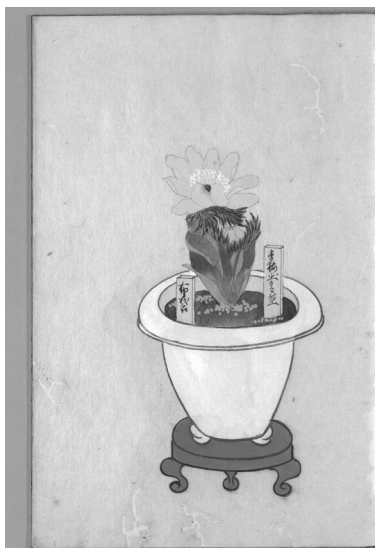


図 7-2 群芳園弥三郎「七福神草」

国立国会図書館蔵 (特 1-565) <https://dl.ndl.go.jp/pid/2535894/1/4>

三才
e



二才
d

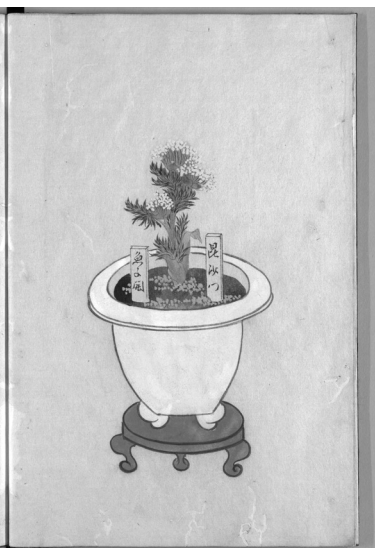
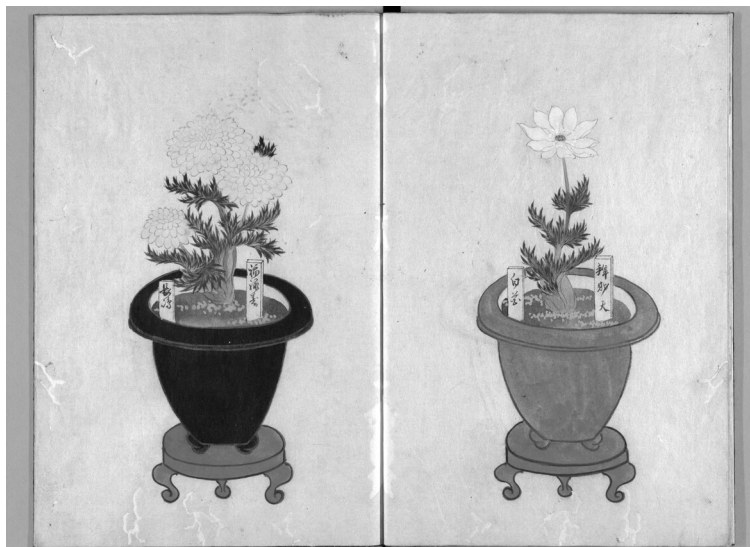


図 7-3 群芳園弥三郎「七福神草」

国立国会図書館蔵 (特 1-565) <https://dl.ndl.go.jp/pid/2535894/1/5>

四ウ
g



三ウ
f

図 7-4 群芳園弥三郎「七福神草」
国立国会図書館蔵 (特 1-565) <https://dl.ndl.go.jp/pid/2535894/1/6>

二才
A



一ウ

図 8-1 内山卯之吉蔵「福寿草・芍薬写生」個人蔵

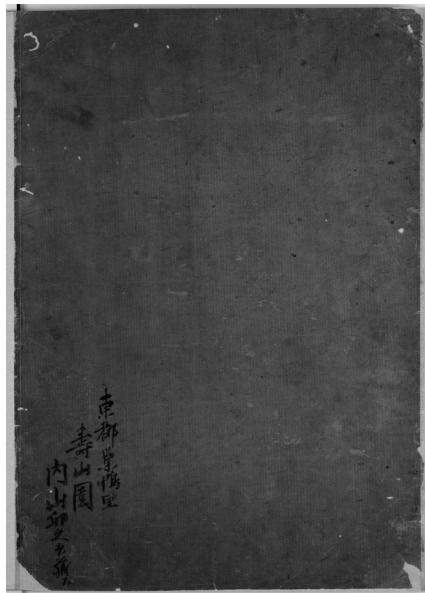
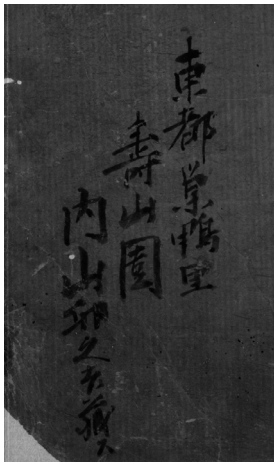


图 8-2 内山卯之吉藏「福寿草・芍薬写生」個人蔵

五才
G



四ウ
F



五ウ

图 8-3 内山卯之吉藏「福寿草・芍薬写生」個人蔵

3 神田佐野文庫蔵「福寿草画賛」の考察

前章でみたように、嘉永元年前後に成立と考えられる内山卯之吉蔵「福寿草・芍薬写生」には鶴亀松竹梅の福寿草図に作者不明の俳句画賛が加えられている。また、江戸千駄木の植木屋松二郎所持の福寿草「杏葉紋り」（「正寿写生」）には同じく植木屋の帆分亭森田六三郎が自撰の和歌賛を寄せている。幕末に園芸流行と文芸の庶民化が平行して進んだ現象例として興味深い。

福寿草図に俳句画賛のある早い例を探すと、『草花画譜画本福寿草』五卷五冊（大岡春卜編・大岡春川画、宝暦五年刊、元文二年自序）巻一の巻頭（二才）「ふくじゆさう 元日草」の画に、大坂の俳人権本旧徳が俳句「種しあれバ岩戸 ひらくや福寿草」を寄せている。

本学日本研究所では、二〇二二年度に古書店より、冒頭に「福寿草画賛」の和歌を記した書写者不明の写本一卷（未装丁）を購入し、神田佐野文庫に収蔵できた。資料名を「福寿草画賛」とした。書状に同封して送られたものか、巻紙（紙高一六cm、長さ一三九・五cm）に和歌一二首が抜き書きされている。前半の七首が香川景枝、後半の五首が富士谷御杖の作である。一連番号を付けて題詞を抜書すれば次の通り。

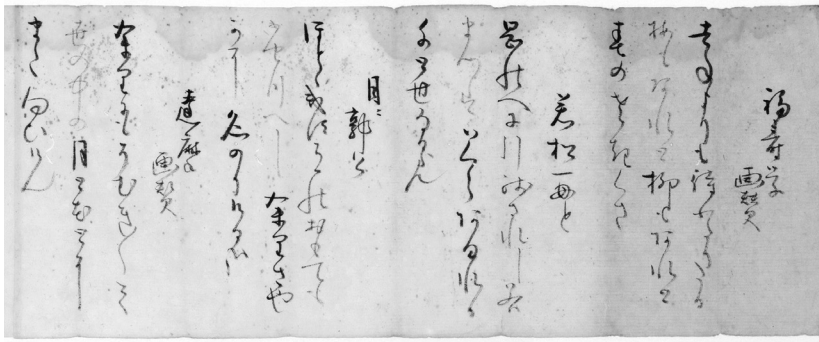
- ① 福寿草画賛
- ② 若松（ひと）一もと
- ③ 月に郭公（ひとしきき）
- ④ 達摩画賛
- ⑤ 陶淵明
- ⑥ 福祿寿の三ツの画の賛をひとつ
よみたるうた
- ⑦ ぶが（舞来）くの画に
- ⑧ 右 香川景枝
福寿艸
- ⑨ 舞猿の画に
- ⑩ ぶ（飛）きの画賛
- ⑪ 扇ひさぐ家のしるしの現金みす
るいふ心をよめといひけれバ
- ⑫ 醍醐に参りける時御杖にかたみ
とありけれバ書つく

右 富士谷御杖

右一二首のうち、⑪と⑫を除く一〇首はすべて和歌画賛であり、うち①⑥⑧の三首は福寿草図の画賛である。

以下図9～図12に原本の写真と釈文を掲げる。和歌に一連番号、濁点、振り仮名、振り漢字を付した。

図9 福寿草画賛（部分） 神田外語大学神田佐野文庫蔵



①

福寿草

画賛

去年(こぞ)よりも待わたりたる
梅もあれど柳もあれど

春のさきくさ(幸)

②

若松(ひと)一もと

岡のべ(い)に引残されし若
まつ(幾代)はいくよあるれば

千と世なるらん

③

月二郭(はと)公

ほと、ぎす月のおもても
ふせつべし余りさや
かに名のりける哉

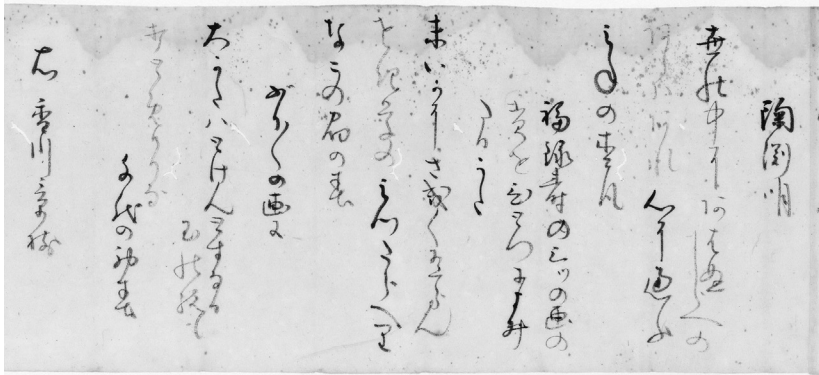
④

達摩

画賛

余りにもそむきくって
世の中の月と花とに
また向かひけん

図 10 福寿草画賛（部分） 神田外語大学神田佐野文庫蔵



⑤

陶淵明

世の中にあはぬ

しらべの

あしハあれ心に通ふ

ミねの奈風

⑥

福祿寿の三ツの画の

賛をひとつによみ

たるうた

末いかにさきく有るらん

さき草のミつたがへり

なが宿の春

⑦

ぶがくの画に

大かたハとげんとするか

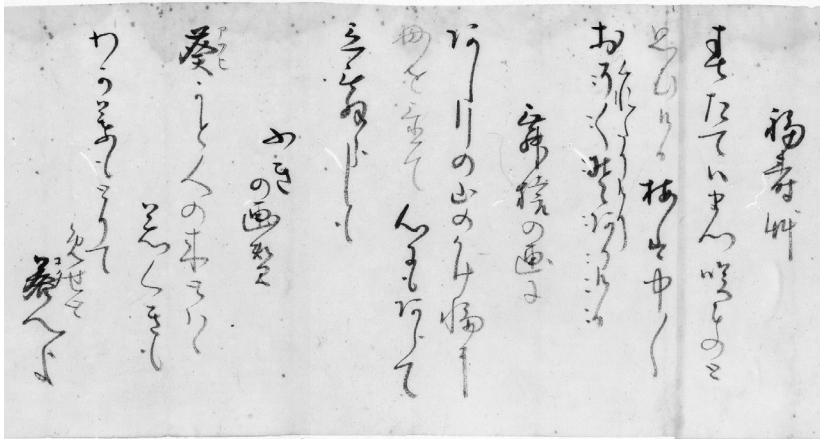
玉の枝も

打どめにける

千代の初春

右 香川景枝

図 11 福寿草画賛（部分） 神田外語大学神田佐野文庫蔵



⑧

福寿艸

春たてばまづ咲くものと思ひける梅も中くおくれたりけり
 〈そくぞありける〉

⑨

舞猿の画に

あし引の山のかけ輪に母を置いて心にもあらで立舞らしも

⑩

(毒)
 ふきの画賛

葵かと人の来とハッ

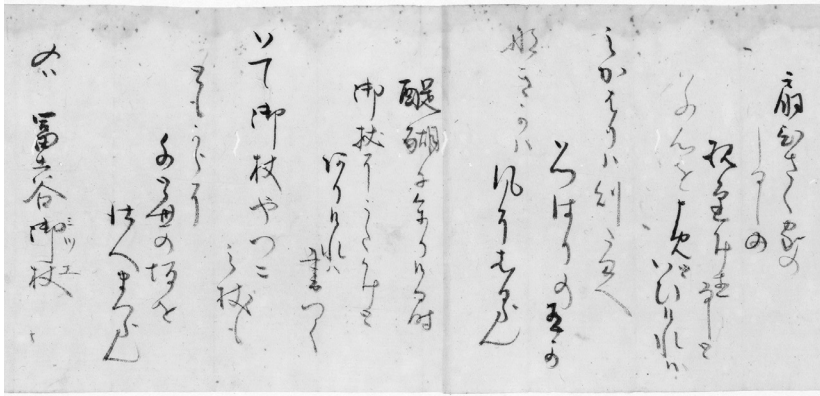
若くきも

わか葉もとりて

めせと

答へよ

図 12 福寿草画賛（部分） 神田外語大学神田佐野文庫蔵



⑪ 扇ひさぐ家の

しるしの

現金かけ直なしと

いふ心をよめと

いひければ

ミがはりハ 則 たたへ

いつはりの有か

なきかハ

風ぞ知るらん

⑫ 醍醐に参りける時

御杖にうたかけと

ありければ書つく

いで御杖やつこ

の杖も

ともがらに

千と世の坂を

仕へまつらん

右 富士谷御杖

香川景枝の福寿草画賛二首のうち、⑥は福祿寿に見立てた、あるいは福祿寿の鉢に植えられた三種の福寿草を詠んだ和歌として注目される。前章で述べたように福寿草を七福神に見立てる趣味は嘉永元年頃に流行したので、この画賛もその頃と推定される。

香川景枝は堂上歌壇に抗して和歌革新を唱えた歌人香川景樹（一七六八～一八四三）の後妻（お柳）の子に生まれた。生年は文政七年（一八二四）らしい。東本願寺家来、六条の島田家の養子となり、掃部と称した¹³。これ以上の伝記も没年も未詳である。

父の香川景樹は大量の画賛を遺したことで知られる。田代一葉（二〇一三）はその原因として、画に秀でた門人小泉東岡（重明）や仏光寺瑞応上人との交流、書画会、席画の社会的流行、景樹自身の経済的困窮を挙げる。田代一葉の同書資料編に翻刻された香川景樹『東塙画賛集』は画賛一一〇四首を収録する。その春歌の部の冒頭には福寿草の画賛八首が並ぶ。うち五首を歌番号とともに引用する。

- 福寿草のかた
- 4 はつ春にはじめてさけばこれをこそ先さき草といふべかりけれ
- 5 こぞよりも待わたりつる梅もあれど柳もあれど春のさ

き草

福寿草みつおひいでたる

6 いさ川いさ其たねはしらねどもこのさき草も花は

みつ有

小松のもとに福寿草

7 わか松の千年の後にさく花を先木のもとに見するはる

かな

梅やなぎの折枝有、福寿草も

8 鶯もかすみもいまだしらぬまの春とりはやすやどのう

ちかな¹⁴

右の傍線を付けた5番は、景枝の福寿草画賛①と全く同一である。『東塙画賛集』は明治一三年に村山松根によって編纂されたもので、編纂過程で影枝の画賛が混入したようだ。景枝の歌歴は不明であるが、父の影響のもと画賛を多作したかもしれない。

神田佐野文庫蔵「福寿草画賛」に景枝の画賛七首とともに和歌五首を抜き書きされた富士谷御杖（一七六八～一八二三）は歌人・国学者として知られる。国学者富士谷成章（皆川淇園弟）の長男に生まれたが、一二歳で父を亡くし、伯父淇園に漢学、叔父皆川成均（成章弟）に和歌を学んだ。同年齡の歌人香川景樹と交流した¹⁵。御杖がどれほどの画賛を遺し

たか、今知るすべを持たないが、景樹との交流のなかで、画賛を好んだかもしれない。ここに記された和歌「福寿草」も、この抜き書きの趣旨および次に続く画賛二首「舞猿の画に」「ふきの画賛」を勘案すれば、画賛に違いない。

おわりに

福寿草栽培の始まりは一七世紀後半に遡るようだ。寛文四年（一六六四）に成稿し、延宝九年（一六八一）に刊行された水野元勝『花壇綱目』の巻上、春草の部に、栽培法が詳説されている。

福寿草 かくしよさう ●花 黄色小輪也。正月初より花咲。元日草ト

モ朔日草トモ福つく草トモ俗に云。●右養土つちの事 肥土こへに砂すなを少かく能ませ合、ふるいにて用て宜し。●肥こへの事 茶からを干成程にしたるに粉にして右之土に少宛交る也。●分植わけうゑ事 二月末より三月節迄、八月末より九月節迄分植也。

盆栽を楽しむ園芸趣味の始まりは正徳二年（一七一二）刊の寺島良安『和漢三才図会』巻第九十二之末の「山草 下ノ巻」の条に垣間見える。

ぐわんじつさう 福寿草 元日草

歳旦初開黄花似半開菊花。人以為珍植盆。称元日草。春夏長尺余生枝條花綻開不堪見。

文化年間に始まる福寿草流行は伝統和歌の革新を唱えた歌人たちの画賛にも反映された。幕末には巢鴨の内山長太郎・卯之吉兄弟を中心とする植木屋仲間のように、庶民レベルで園芸趣味と俳句や和歌の文芸趣味が結びつき、美麗な福寿草図譜が生まれた。

本稿で参照した享和年間成立の「珍花福寿草」、加賀文庫の「福寿草紅葉絵本」「福寿草奇品譜」はさらに検討を要する。福寿草二一品に本草学的記載を加えた坂本浩然（嘉永六年没）の『福寿草奇品譜』（杏雨書屋蔵）、盆栽彩色図一三二図からなる採珍堂水滸輯録「福寿草譜」（杏雨書屋蔵、安政年間成立か）については機会をあらためて考察したい。

【謝辞】

本稿の成るにあたって、山本読書室旧跡ご当主山本和彦氏、内山卯之吉「福寿草・芍薬写生」のご所蔵者からご厚情を賜りました。鈴鹿市大黒屋光夫記念館学芸員代田美里氏から貴重な情報を提供していただきました。千葉県立中央博物館、東京都立中央図書館、杏雨書屋には資料熟覽でお世話

になりました。関係各位に心より御礼申し上げます。

註

- (1) 京都の古美術入札市『古裂会オークションカタログ』Vol.45 (2008/11)、二九七頁。
- (2) 松田清編「山本読書室資料仮目録 統合電子版」一三三七番。
- (3) 松田清『京の学塾 山本読書室の世界』京都新聞出版センター、二〇一九、九八頁参照。
- (4) 磯野直秀『日本博物誌総合年表』平凡社、二〇二二、六二六頁、嘉永元年一月の項目に記載の『七福神草』(国会図書館蔵、特一〇〇〇)。磯野は、その後記により、植木屋の栽花園内山長太郎と帆分亭森田六三郎が群芳園斎田弥三郎を訪れたとき、群芳園の描いた名品七点にそれぞれ七福神の名を付けたもの、と紹介する。
- (5) 松田清、前掲書、九八頁、二月九日のコラム。
- (6) 千葉県立中央博物館所蔵「珍花福寿草」。「同館岩佐亮二文庫の一冊。現代の装丁本で、題簽に岩佐亮二筆とおぼしい「珍花福寿草」の墨書、内題に異筆で「享和年献上／珍花福寿草 写生画」の墨書があり、切り抜かれた彩色肉筆画一五枚を每半丁に貼り付ける。各図は花鳥

- 草木風景など意匠をこらした鉢植の福寿草を写生する。各鉢に立てられた札の花銘は順に次の通り。「鳳凰」「羽ころも」「菊八重咲」「乱獅子」「ち、ぶ紅」「根獅子」「水野白」「小盃」「那々子咲」「撫子咲」「白釵先」「蓮花咲 替り」「山吹咲」「撫子咲」「孔雀尾」
- 青木宏一郎『江戸のガーデニング』(平凡社、一九九六)六八―六九頁に「ち、ぶ紅」「蓮花咲 替り」「孔雀尾」「撫子咲」(二図のうちの前者)「乱獅子」「羽ころも」が写真掲載された。「享和年献上」の事情は後考を待ちたい。
- (7) 磯野直秀(二〇〇三)『植物図説雑纂』について参考書誌研究、二〇〇三年一〇月、二二頁。
- (8) 註(4) 参照。
- (9) 生没年未詳。『国書人名辞典』岩波書店、「草間宗仙」項目。
- (10) 註(6) 参照。
- (11) 「福寿草紅葉絵本」二冊(東京都立中央図書館蔵加賀文庫、縦二四七mm×横二五六mm)。第一冊(3985-1、福寿草図集)の本文三四丁の每半丁に一図(三〇ウのみ二図)、鉢を省略して立て札のみ添える。第二冊(3985-2、紅葉図集)の末尾に、「文化十二乙亥中夏写／奥山正容時年六拾三(印)」と墨書する。

なお同館所蔵の画帖「福寿草奇品譜」(加賀文庫4105)、一四折、縦三三三mm×横二四三mm、全二八図)を「七五三福寿草写生」と比較すると、鉢は省略されているが、「青梅青軸咲」(四オ)は⑬、「弁天白」(五オ)は⑭、「裏絞り石竹咲き」(五オ)は⑩に、近似している。種々の福寿草図譜から写し取ったものと推定される。詳しくは後考を待ちたい。

(12) 小川安村編『梅譜 附福寿草』第三版(明治三四年、東京三田育種場蔵版) 四四〜四五頁。

(13) 兼清正徳『人物叢書 香川景樹』(吉川弘文館、一九七三) 一三〇頁参照。

(14) 田代一葉(二〇一三)『近世和歌画賛の研究』(汲古書院)、第三章「香川景樹の画賛——歌日記を中心に」参照。

(15) 田代一葉(二〇一三)、二八一頁。

(16) 多田淳典『増訂 異色の国学者 富士谷御杖の生涯』(思文閣出版、一九九五)、一六八〜一六九頁参照。

(補註1)

山本読書室に『七五三福寿草写生』の伝来した背景には山本亡羊と幕医曲直瀬養安院正貞(号楓簷、一八〇九〜五八)との交流が考えられる。元幕府官僚・本草家栗本鋤雲は「内

山長翁伝」(明治一六年成)で楓簷が内山長太郎の栽花園に通った逸話を紹介する。

天下の本草を好み聞見を博ふせんとする者、遠近貴賤と無く必ず訪ふて翁の栽花園に到る。于レ時曲直瀬楓簷先生、海内博物家の宗と称せらる、も、常に人に語て曰ふ、余二十年來一歳二三栽花園を過ぐる毎に、必らず未見の品を見ざる無しと。其広蒐博募憶ふ可し(『匏菴遺稿後編』明治三三)。

楓簷は山本亡羊に師事し、亡羊の古稀に賀詩を贈っている。また、内山卯之吉は兄長太郎の栽花園の隣地に寿山園を営んでいた。楓簷は卯之吉宅をもしばしば訪れたにちがいない。

(補註2)

東京都立中央図書館所蔵の木版多色刷り小冊子『五福草』(東京誌料八二七二)は、内山卯之吉蔵「福寿草・芍薬写生」の俳句賛と同じ五句を秩父紅、酒依紅、撫子咲、車屋白、松葉重の五図に配しているが、鉢はすべて省略し、花・葉・枝は図柄も色彩も異なる。奥付「嘉永二酉歳正月吉日／羣芳園弥三郎／栽花園長太郎／帆分亭六三郎／寿山園卯之吉」から、卯之吉が中心となり「福寿草・芍薬写生」を基に庶民向けに刊行したことが分かる。



【口絵1】内山卯之吉蔵「福寿草・芍薬写生」部分 個人蔵



【口絵2】山本讀書室資料「七五三福寿草写生」部分 京都府立京都学・歴彩館寄託